

サハリン島アイヌ民族の「三人きょうだい譚」の成立仮説

— ニヴフ民族の「三人の獵師」からの影響 —

丹菊 逸治

はじめに

サハリン島のアイヌ民族（以下「サハリンアイヌ」と呼称する）に伝承されてきた散文説話 *Uyrah* トウイタハには北海道のアイヌ民族（以下北海道アイヌ」と呼称する）の口承文学とは異なる特徴がみられ、独特の話が多い。なかでも三人きょうだいが登場する話（以下「三人きょうだい譚」と呼称する）は北海道に類話がみられない独自の話群である。ところが、北部で隣接するニヴフ民族（以下ニヴフと呼称する）の間では三人の獵師が登場する説話が多く採録されている。この「三人の獵師」の伝承は中国との交易を背景に、おそらくクロテンなど毛皮獣の罨猟と結びついて成立した伝承であり、ニヴフの社会制度・狩猟伝統に一致する。叙述の人称形式、主人公を援助する「不思議な老婦人（女神）」などの登場人物からみても、アイヌ民族の「三人きょうだい譚」はニヴフの「三人の獵師の話」の影響で成立した可能性が

高い。これはより広くみられるサハリンアイヌ口承文学におけるニヴフ口承文学からの影響の一部と考えられる。

一 アイヌ口承文学の散文ジャンル

北海道における散文説話ジャンル（沙流方言地域の例）

一人称	ウウエベケレ <i>uwepoker</i> (の大部分)	形式化が進んでいる
三人称	ウウエベケレ <i>uwepoker</i> (パナンベ・パナンベ譚のみ)	ウバシクマ <i>upaskuma</i> 自身の体験談 地名に関する伝承など
一人称	ウチャシコマ <i>ucaskoma</i> ルルバ村・狩猟に関する伝承	形式化が進んでいない
三人称	トウイタハ <i>uyrah</i> パナンベ・パナンベ譚 三人きょうだい譚その他	ウチャシコマ <i>ucaskoma</i> 自身の体験談 実在の地名が登場する伝承 地名に関する伝承など

サハリンにおける散文説話ジャンル

北海道アイヌ口承文学において散文で語られるものには、形式化が進み一人称叙述形式で語られる「ウウエベケレ uwepkeker」と呼ばれる話と、形式化が進んでおらず三人称叙述形式で語られるウパシクマ upaskuma と呼ばれる話がある¹⁾。前者は物語性の強い話が、後者は話者個人の体験談やさまざまな言い伝えなどが中心となる²⁾。ここで「形式化が進んでいる」というのは、無名性（主人公の名前が語られない）や展開のパターン化、カムイ（神々）との会話、語りの紋切型の表現などがみられることを指すが、物語性の強い話に見られる特徴でもある。形式化が進み物語性が強い話を本稿では「説話」と呼称する。ウウエベケレがこれにあたる。ウウエベケレは多くが一人称叙述形式で語られるが、「隣の爺」型説話である「パナンペ・ペナンペ譚」だけは三人称叙述形式で語られる特殊なサブジャンルをなしている。

サハリンアイヌ口承文学においては、北海道アイヌ口承文学にみられる「ウウエベケレ uwepkeker / ウパシクマ upaskuma」という名称の対立がなく、ともにウチャシクマ ucaskoma という同じ名称で呼ばれる。一方で、北海道アイヌ口承文学の「パナンペ・ペナンペ譚」にあたるものが、さらに多様な内容となり「トゥイタハ tuiyaha」と呼ばれるジャンルをなしている。

二 サハリンアイヌ口承文学とニヴフ口承文学に共通するいくつかの話

アイヌ口承文学の多くはいわゆる「一人称叙述形式」であり、三人称で語られる物語はむしろ例外的であることが注目されてきた。北海道アイヌ口承文学における三人称叙述形式のサブジャンル「パナンペ・ペナンペ譚」には本州以南の「隣の爺」型説話からの影響が指摘されている。同じようにサハリンアイヌ口承文学における三人称叙述形式にも外部からの影響を想定しうるであろう。ニヴフ口承文学とサハリンアイヌ口承文学の間には伝播によるとみられる共通の話がいくつか確認できる。カラスやアザラシとの異類婚譚、多数に分裂するトラ（サハリンアイヌにおいてはヤマネコ）の化け物、知里真志保が「空家の化け物」と呼んだ話など。また村崎恭子が「砥石男」や「アザラシの胃袋」などと題した動物寓話的な話もある³⁾。やはりどちらかといえば三人称形式の話が多い。一方で明らかに一人称形式で語られ細部まで一致する話がクマとの異類婚譚にみられる。これは展開から見てもおそらくクマ送り儀礼と関係づけられた話であり、また別に考察が必要であろう⁴⁾。

三 サハリンアイヌ口承文学の「三人きょうだい譚」の独自性

サハリンアイヌに伝承されてきた散文説話トウイタハ *tyitah* には北海道アイヌ口承文学とは異なる特徴がみられ、独特の話が多い⁽⁵⁾。なかでも「三人きょうだい譚」は北海道に類話が見られない独自の話群である。三人兄弟あるいは三人姉妹が登場する話が多数採録されている。特定のジャンルに必ずしも限定はされないが、傾向としてはトウイタハに多い⁽⁶⁾。三人きょうだいが登場し、ある課題に二人が挑んで失敗し、最後の一人が成功する。成功する一人は能力が劣るとみなされていた者である。このような話は世界的に分布する。例えばロシア魔法昔話の「愚かなイヴァン」などの話である。これらの特徴は口承文学において頻出するモチーフ、きわめて出現しやすい構造とみなされている。

だが、この構造の話は北海道には少ない。むしろ、ある課題に複数の者が順番に挑戦し、最後の成功が語られるという話自体は北海道でも存在する。有名な叙事詩「虎杖丸」(「クトウネシリカ」⁽⁷⁾)の冒頭部分でも、「黄金のラッコ」の入手という課題に多くの勇者が挑戦して失敗するのに、主人公の少年英雄はやすやすと成功するというエピソードがある。また、成功した者を真似た愚か者が失敗する、いわゆる「隣の爺」型の話である

パナンベ・ペナンベ譚も、「成功／失敗」という要素の順番は異なるものの、同じ内容が繰り返されるという点で構造としては共通する部分があるとみなすこともできよう。だがそれらに比較するとサハリンアイヌの「三人きょうだい譚」のほうが、はるかに「愚かなイヴァン」の話に類似する。

高度に発達した北海道アイヌ口承文学において「三人きょうだい譚」が少ないことは注目に値する。「繰り返しの効果」「小から大へという流れ」「弱いと思われた者が本当は実力を持っている」という対照の効果」などを否定するわけではない⁽⁸⁾。だが、それらが普遍的に三人きょうだい譚を生み出すと考えるならば、実際に北海道アイヌ口承文学にほとんど例がないのはなぜか(あるいは「なぜサハリンにはあるのか」)を説明しなくてはならない。本稿では、この「三人きょうだい」がニヴフの「三人の獵師」の影響を受けて成立した可能性を指摘する。

四 ニヴフ口承文学における「三人の獵師の話」

サハリンアイヌは北部でニヴフに隣接してきた。ニヴフ口承文学では二人きょうだいが登場する説話のほかに、三人の獵師が登場する説話が多く採録されている。まず二人きょうだいが連れ立って獵に行く、というやり方はニヴフ伝統社会の現実(即したものであったと考えられる。年長者が親族の年少者、すなわち息子や弟を獵(あるいは漁)の助手として連れて行くの

は現在でもよくあることだが、少なくとも半世紀以上過去においても同じであったという話は今でも聞くことができる。⁽⁹⁾

では「三人の獵師」の場合はどうだろうか。三人の登場人物がきょうだいとされている話は比較的少なく、多くはベテラン獵師二人と若者一人でクロテン異獵に出かける、という設定になっている。ベテラン二人は若者を虐げる。そこへ不思議な老婦人が現れ、若者を助ける。あるいは老婦人が三人を助けるが、ベテラン二人は不敬を働く。いずれにせよ、若者だけが成功し、多くの場合は経済力をつけた若者の幸福な結婚で終わる。

ニヴフの狩獵伝統においては、ベテランと若い助手という組み合わせは実際によく見られたようである。⁽¹⁰⁾ 口承文学中ではしばしばベテラン二人と若い助手一人となっている。この数字が厳密に実態を反映したものかどうかは今後も検証が必要であるが、口承文学中でのこの組み合わせについては、「二人の舅（アハマルク）と一人の婿（ウムギ）」「父子と甥」「三人きょうだい」の三通りがある。

ニヴフ伝統的社会にはカルと呼ばれる父系リニツジ制度がある。日本語では「氏族」などと訳されることもある。同一リニツジ内での婚姻は禁止され、女性は他リニツジの男性と結婚しなければならぬ。生まれた子どもが男性であれば、母親の出身リニツジの女性と優先的に結婚する。このとき、女性の出身リニツジの男性が「アハマルク」、女性の子どもが男性であれば「ウムギ」と呼ばれる。彼らは潜在的には「舅と婿」の関係にある。

口承文学にもこの制度が反映されている。まず「獵の助手となる」という話の発端自体、婿から舅への労働奉仕という慣行の反映と考えられる。⁽¹¹⁾ また「夫に死なれた母が息子を連れて兄のところを身を寄せる」という設定が語られる話もあるが、これは同一リニツジ内の扶養義務というニヴフ伝統社会の制度に一致する。つまり母は自分の出身である父系リニツジの援助をあてにできる。その息子も母の口添えで援助してもらうことができる。息子は母の口添えで援助していただくことが可能ではあるが、息子本人は同一リニツジ出身ではないのでこの援助は義務ではない。クロテン異獵の獵場となる小川は父子相続財産もしくは同一リニツジの所有とされていたが、別リニツジ出身の息子の立場は弱かったはずである。「三人の獵師」において「虐げられる年少者」はしばしばこのような親族関係におかれているのである。

ロシア語で刊行された資料では三人の獵師の関係が「父子と甥」とされているケースがある。ニヴフ語の親族呼称が記載されていないために肝心の、同一リニツジとなる「父の兄弟の息子」なのか別リニツジとなる「父の姉妹の息子」なのか分からない。原文の公開を待ちたいところである。最後の組み合わせつまり「三人きょうだい」とされる例は全体から見れば少ないが、比較的叙事詩に多くみられるようである。

これら「三人の獵師」が登場する話の内容は多様だが、「トラ報恩譚」「最年少のクロテン異獵師を不思議な老婦人が援助する話」などいくつか典型的な話群が存在する。「トラ報恩譚」

については先行研究でトゥングース諸民族の伝承との関係が指摘されている¹³。これは典型的には「大言壮語した獵師がトラの怒りを買って追いかけるが、逆に木の枝の又に首が挟まったトラの命を救う。トラは獵師を山奥のトラの村に連れて行き、宝物を与える（あるいはトラの娘と獵師が結婚する）」というものである。ニヴフにはこの話群以外にトラに関する伝承が非常に少なく、またトラの分布域はニヴフの伝統的居住地域より南方である。この話群は先行研究で示唆されているようにおそらくトゥングース諸民族からニヴフに伝播したものであろう。なお、ベリー採集に行った三人姉妹が赤ん坊を拾ってくる（その赤ん坊の正体は化け物であり、話の後半は呪的逃走譚になる）という、性別がほぼ女性に固定されている話もある。この話は従来指摘されているように原形がかなりよく保たれたままアムール下流地域に広く分布している¹⁴。

五 クロテン・畏獵と「三人の獵師の話」の成立

ニヴフの「三人の獵師の話」は清帝国との交易を背景に、おそらくクロテンなど毛皮獸の畏獵と結びついて成立した伝承である。内容も現実にあったニヴフの社会制度・狩獵伝統に一致する。おそらくその成立期は清帝国との毛皮交易が盛んとなって以降と思われる。

クロテン毛皮は自家消費用ではなくあくまで交易用だった¹⁵。ク

ロテン交易には船あるいは犬ぞりで交易所まで赴く（口承文学中ではしばしば描写がある）必要がある¹⁶。クロテンは創世伝承等には登場せず、ニヴフ人自身も自分たちの古い文化とはみなしていなかった可能性がある。クロテン交易が登場する話では主人公たち（マンチュ人）の都市に赴くが、そこには「チャンギ」（マンチュ人など異民族のお偉いさん）が住んでいる。

また、年若い主人公を援助する「不思議な老婦人」はニヴフ口承文学において、比較的新しい登場人物である可能性がある。ニヴフの伝統的世界観において重要な位置を占める「自然界の支配者」はウズンと呼ばれるが、これは基本的には男性とみなされる。狩獵・漁労の成否を左右する「山のウズン」「海のウズン」は特に重要な存在と考えられているが、やはりいずれも男性とされる。この「不思議な老婦人」は山のウズンと非常に類似しており、ときにはほぼ同一視される¹⁸。だが基本的にクロテン・畏獵の口承文学中のみ登場する存在である。実際の儀礼において言及されるのは男性とみなされる「山のウズン」だけである。こうしてみると「三人の獵師の話」はニヴフ口承文学においては、比較的新しく語られるようになった話群と考えられる。そもそもクロテン・畏獵文化自体が、おそらく地理的にもより清帝国に近いトゥングース諸民族の間で先に成立した可能性が高い。「三人きょうだい譚」が成立したのも必ずしもニヴフ口承文学においてはではないかもしれない。トゥングース諸民族からニヴフに広がるクロテン・畏獵文化地域のどこかで生まれたのであろう。

六 トウイタハ *tuŷtan* の人称形式

すでに述べたように北海道においては一人称叙述形式は物語ジャンルの基本的な特徴として広く普及しており、むしろ三人称叙述形式のほうが「形式化が進んでいない」とみなしうる。サハリンアイヌ口承文学においてもウチャシコマ *ucaskoma* に関する限りは、同様の視点が有効と思われる。ウチャシコマにおいては、一人称叙述形式の話は「ルルバ村・狩猟に関する伝承」を内容とする。一方、三人称叙述形式の話は実在の地名が登場する、むしろ歴史的な話であり、内容から見ても形式化が進んでいない。

だが、トウイタハ *tuŷtan* は三人称叙述形式でありながら非常に形式化された内容を持つ。サンヌピヒ *sannupih* (あるいはサンヌピシ *sannupis*) 村という架空の舞台、ホロケーボ *horokepo* やカムイアハチ *kamuyachi* など決まった呼称の登場人物、幸福な結婚という紋切型の結末などである。つまり「ウチャシコマのうち三人称で語られる話群」と「トウイタハ」は同じく三人称叙述形式をとっているが、全く別のジャンルである。そこに含まれる「三人きょうだい譚」も「パナンペ・ペナンペ譚」と同じく、形式的にも内容的にもまとまった三人称叙述形式の散文物語である。つまりトウイタハはアイヌ口承文学全体から見ると「三人称叙述形式を持つ特殊な散文説話」である。

だが、隣接するニヅフ口承文学は「三人の獵師の話」などの散文説話を含め基本的にすべて三人称形式で語られる⁽²⁰⁾。トウイタハはニヅフ口承文学と同じ叙述人称形式をとっていることになる。

七 不思議な老婦人

ニヅフの散文説話の「若者を援助する不思議な老婦人」と同様に、サハリンアイヌのトウイタハにも「末弟を援助する不思議な老婦人」が登場する。北海道においては、このような(主人公を援助する)登場人物は最後に正体が明かされるのがふつうである⁽²¹⁾。あるいは正体が明示的に語られなくともある程度は推測できる。だが、トウイタハの「老婦人」はたんに「カムイアハチ *kamuy-achi*」「神のような老婦人」、「アハチャハチポ *ahciachipo* (アハチ・アハチ・ポ *ahci-ahci-po*)」「おばあちゃん」と呼ばれるだけであり、いかなる動物や自然現象などの性格であるとも語られない。他の登場人物についてはチェベヘテカム *icepehekamuy* 「魚をつかさどる神」などと正体が明かされるので、この老婦人はサハリンアイヌ口承文学においては特別な登場人物といえる⁽²²⁾。

八 「三人の獵師」と「三人きょうだい譚」

サハリンアイヌの「三人きょうだい譚」と、ニヅフの「三人

の「獵師」の登場する話群には、異類婚譚や動物寓話のいくつかの話のような細部まで一致するような類似はない。だが、これまでみてきた「三人」「三人称叙述形式」「不思議な老婦人」の大きな一致は偶然とは考えられない。そして偶然でないとするれば、北海道ではなくニヴフに共通性があるという分布からみて北から南に伝播したものであるという可能性が高い。サハリンアイヌが清帝国との交易に参加するようになったのは十八世紀以降と考えられるが、その際にニヴフを始めとする諸民族の口承文学と接触したはずである。「三人の獵師」の話群も伝播したに違いない。だがニヴフ的な父系リニツジ制度に基づく部分は、むしろ双系制的な社会を背景とするアイヌ口承文学には馴染まなかったであろう。そのため「二人の舅（アハマルク）」と一人の婿（ウムギ）」という登場人物がたんなる「三人きょうだい」に置き換えられたのではないだろうか。細部の変更も大きかったはずである。南部西海岸のサハリンアイヌの伝承にはクロテンがほとんど登場しない。サハリンアイヌもクロテン毘獵に従事していたが、その重要性は地域によって異なる。ニヴフの「三人の獵師」も基本的に山がちのサハリン中部で盛んな伝承であり、北部海岸地域で採録された類似の伝承は漁や海獣獵の話になっている。

サハリンアイヌの「三人きょうだい譚」とニヴフの「三人の獵師」の構造上のもっとも大きな違いは「繰り返し」の要素の有無である。サハリンアイヌの伝承には「始めの二人が次々に

失敗し、最後の一人が成功する」という繰り返しが明確に語られる話が多い。ニヴフの伝承では、同じような繰り返しを持つ話はむしろ少数である。「二人の失敗と一人の成功」という意味では似ているが、繰り返しは明確に語られない（全くないわけではない）。「繰り返し」が明確に語られるのはロシアから伝播した「愚かなイヴァン」の話である。ここでは「イヴァン」という主人公の名前や、穴に下りるロープを切られる場面など、かなり正確に原形が保たれている。サハリンアイヌの「三人きょうだい譚」としては「愚かなイヴァン」などロシア系統の話は今のところ確認されていない。ただし、子どもが箱に入れて流される話や、「チヒポ（チシポ）」と呼ばれる不思議な生き物が夫を誘惑する話など、サハリンのニヴフを越えてさらにアムール地方につながりそうな話もいくつか存在する。かつては「靴に合った足を持つ女性を探す男性の話」など「シンデレラ」的なモチーフが登場するトウイタハも存在していた⁽²⁴⁾。

こうしてみると、サハリンアイヌとニヴフの口承文学の類似が示唆するのは、個々の話や「三人の獵師」という個別の影響だけではない。一人称叙述形式が主となるアイヌ口承文学全体からみて、北海道において発達した「パナンペ・ペナンペ譚」というサブジャンル、サハリン独自の「トウイタハ」というジャンルそのものが、それぞれ本州以南、ニヴフという別の口承文学からの影響によって成立したという可能性がある。

九 残された問題

ニヴフ口承文学においても、叙事詩にはたんなる親族ではなく「三人きようだい」が登場することがあるが、その場合は「長兄が怠惰で第二人がその世話を焼く」という少し異なった関係になっていることが多い。叙事詩については昔話などとは別に考える必要がある。ニヴフの叙事詩にはトゥングース諸民族よりアイヌのそれに類似する点がいくつもある。ひよつとするとニヴフの叙事詩に登場する「三人きようだい」はアイヌ口承文学において確立した要素が逆に再流入し、ニヴフ的に変形されたものなのかもしれない。

サハリン口承文学にみられる、ニヴフ口承文学との共通性・類似性は「三人きようだい譚」だけではない。クマ伝承の一部にはニヴフ的な要素がみられる。いっぽうでカラスや海獣との異類婚譚など、どちらから伝播したのか不明な共通性もある。これらは現在のところ民族を超えた「サハリンのな話」としておき、近隣の諸民族の伝承に類似性の高い話がないか確認していく必要がある。

広範囲に分布することがすでに二〇世紀初頭から指摘されている話もいくつがある。ガンギエイとの異類婚譚⁽²⁶⁾、陰部に歯がある女性の話⁽²⁶⁾、三人姉妹の魔物からの呪的逃走譚⁽²⁷⁾などである⁽²⁸⁾。これらに関しては今後はより精密な比較が必要となるはずである。

周辺諸民族の口承文学研究に比較してもアイヌ口承文学研究の蓄積は大きい。今後は周辺諸民族の口承文学に関する研究成果を総合していくことが重要である。たんに話の構造のみを比較するのではなく、各民族の口承文学の物語世界自体をみすえた比較も可能となってきた。

引用文献

- 稲田浩二『昔話の源流』一九九七 三弥井書店
荻原眞子『呪的逃走——ユーラシアへの手がかり——』『口承文学研究』第三〇号 二〇〇七 日本口承文学学会
金田一京助『虎杖丸』『金田一京助全集』第九卷 一九九三
三省堂 初出 一九三一『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』（第二冊）東洋文庫
知里真志保『アイヌの散文物語』『知里真志保著作集』第二卷 一九七三 平凡社 初出『北方文化研究』第一〇集 一九五五 北海道大学
藤村久和『樺太アイヌの言語と民話についての研究資料 八』『創造の世界』第五十三号 一九八五 小学館
松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』二〇〇六 京都大学 学術出版会
村崎恭子『浅井タケ口述樺太アイヌの昔話』二〇〇一 草風館
シュテルンベルグ Stenberg, Lev. *Materialy po Izučeníi Gilackogo Āzyka i Fol'klora. Tom 1*, SPb. 1908

注

- (1) 名称は地域によって異なる。ここであげたのは沙流方言地域の例である。
- (2) 知里真志保らはウパシクマは由来を説く観点から見た呼称であり、ウウエペケレやカムイユカラなど形式から区別するジャンル名とは異なると指摘している。つまり「クマが登場するウウエペケレ」は「クマに関するウパシクマ」「言い伝え」でもある。本稿ではウパシクマがウウエペケレ以外の伝承を指示しうることから「ウウエペケレ」というジャンル名と並置して用いた。
- (3) 「村崎恭子二〇〇一」でのタイトル。
- (4) この話はサハリンアイヌ、ニヅフ、ウイルタの三民族に共通の類似例が採録されている。いずれも祭壇で「人間の姿をしたクマ」と待ち合わせるという場面がある。またクマ送り儀礼で用意される料理などが登場する。「藤村久和一九八五」ではウイルタの類似例について、サハリンアイヌからの伝播と推測している。
- (5) サハリン独特と思われる話にも、実は北海道でごく少数の類似例がみられる場合がある。それらは昭和初期以前のものであり、しかもあらずじだけが記録されており、採録地・語り手・ジャンル等のバックデータを欠いている。これが「北海道にもあつた話群の衰退」を意味するのか、それとも実はサハリンの伝承が紛れ込んでいたことを示すのか、など資料批判自体が今後の課題となる。本発表では、これらの伝承がサハリンとの共通性を示すことを指摘するにとどめる。
- (6) ただし、いわゆるウチャシコマ ucaskoma の資料は全体数が少ない。
- (7) 「金田一京助一九九三」など。
- (8) それら文芸的側面が伝播とどのように関わるか、という研究は今後の課題である。
- (9) 同一リニツジ内の年少者は近い年長者の意思に従わなくてはならない。クレイノヴィチの記述している例では、兄弟が同居している場合には兄のそぶりを見て弟が猟に出る支度をととのえてやらねばならない。
- (10) 現在ではクロテン猟がほとんど行われないため、これは二人きょうだいの事例と異なり、直接確認はできないが、体験談や伝聞として聞くことはできる。
- (11) 伝統的には多くの地域で花婿側は花嫁側に婚資を払うか、労働奉仕する義務があった。ペテランのアハマルクが若いウムギを助手とするのは、「潜在的な婿を一人前の猟師に鍛える」と同時に労働奉仕的な側面があると思われる。
- (12) 前述のとおり母親の兄にとって、その息子(妹の息子)

は潜在的な婿である。

(13) 「シュテルンベルグ一九〇八」など。

(14) 「荻原眞子二〇〇七」など。

(15) クロテンに限らず小型毛皮獣の毛皮を用いた衣服・道具などはほとんどなかった。

(16) 犬ぞりの維持にかかる経済的コストは大きい。犬のえさ用の魚の調達にはかなりの労働が必要となる。犬ぞりの普及時期についても再検討の余地がある。

(17) 本来はこの「ウズン」という語もトゥングース系言語からの借用語と思われる。ニヴフ語には日本語の漢語彙にあたるような、大量の借用語層は確認できていない。借用語はその事物や概念が、外部からの比較的新しい影響であることを示唆する。父系リニツジを中心とする社会構造とウズンを中心とする世界観とともにトゥングース諸民族の影響を強く受けたものという可能性が高い。その観点からかつての民族学者ら（シュテルンベルグなど）はニヴフ民族のもう一段階古い文化を「母系社会」と推測した。

(18) 「山の支配者の妻」とされることもある。同じように特殊な存在として「陰部に歯がある女性」がある。この話はおそらく外来と思われる。

(19) 「ピウスツキ一九一二」の指摘。彼と「知里真志保一九七三」はそれぞれ別のアイヌ語名称をあげている。

(20) 悲恋を題材にした叙情歌は一人称形式で歌われるが、こ

れは叙事的な物語文学とは異なる。

(21) 動物神、水の女神などさまざまなカムイが正体でありうる。この「正体を明かす」という展開は散文物語に限らず、神謡や叙事詩などにおいても共通する傾向である。

(22) 「不思議な老婦人」はニヴフにおいても、サハリンアイヌにおいても特殊な存在である。つまり本来はニヴフ起源ですらなく（地理的な推測からは）トゥングース諸民族からの伝播という可能性は高い。

(23) 「松浦茂二〇〇六」

(24) 「ピウスツキ一九一二」

(25) 「シュテルンベルグ一九〇八」はアイヌ民族からニヴフ民族への文化的影響と考えていた。

(26) これについては北海道でも採録例があるが、その資料批判等は今後の課題である。

(27) これについては「ピウスツキ一九一二」、「荻原眞子二〇〇七」などの指摘・考察がある。ただ、大陸方面だけでなく津軽海峡以南の和人の伝承との類似も改めて考える必要がある。

(28) ほかに「稲田浩二一九九七」が指摘した「魚族の橋」や山姥の話などもある。

(たんぎく・いつじ／北海道大学)